

# 編 修 趣 意 書

## (教育基本法との対照表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
28-17	高等学校	地理歴史科	日本史B	
※発行者の番号・略号	※教科書の記号・番号	※教科書名		
35 清水	日 B 313	高等学校 日本史B 新訂版		

## 1 編修の基本方針

本書は、教育基本法第2条に示された教育の目標を達成するため、以下の基本方針に基づき編修されました。

### ① 多角的な視点を育み、思索を深める日本史

- ▶ 日本史に関する知識を身に付け、それを生かして現代の様々な事象と課題の真理を追究し、よりよい未来を築くことができるよう、丁寧かつ具体的に記述しました。(教育基本法第1号に対応)
- ▶ 日本史を謙虚に学び主体的に考察する姿勢を重視し、公正な態度や道徳心を養うことができるよう配慮しました。テーマタイトルを疑問形として考察を促す工夫をしたほか、図版やコラムを豊富に用意し、多面的・立体的な歴史像の構築に役立つものとししました。(同第1号に対応)

### 第3章 律令国家の成立と都城

この章は、日本国家の成立と律令国家の成立を扱っています。...

8 律令体制はどのようにして成立したのか

中国では、618年に隋が滅び、唐に変わったが、強大な唐帝國の成立は東アジア世界に衝撃をあたえた。この情勢に対処するため、高句麗・百濟・新羅では、政治権力の強化をめざして政変がおこった。倭国でも、繁栄する国際情勢に対応して、内政・外交政策をめぐる政権内の対立がはげしくなった。

645年、中央集権的な新しい国家体制をめざす中大兄皇子・中臣(のち藤原)鎌足らは、蘇我本宗家に権力を集中して王権を支える方式をとろうとした蘇我蝦夷・入鹿父子をクーデタで倒した(乙巳の變)。同年、皇極天皇が譲位し、孝徳天皇が即位。左大臣に藤原内麻呂、右大臣に蘇我倉山石石川麻呂、内匠に中臣鎌足、隣に留守したことがある僧侶と高向玄理が藤原家に登用された。そして都を藤原に移して(難波長柄倉移都)、新政権が発足した。新政権は、翌年1月に政治改革の方針を示し(改新の詔)、税制や官制などの一部を実施した。乙巳の変以後の一連の政治改革を天化改新という。

百濟政変戦争

孝徳の死後、655年、皇極天皇が政変天皇としてたがび即位(皇仲)した。このころ唐は、敵対する高句麗の制圧をめざして出兵を再開した。これに乗じて百濟は唐を攻撃したが、新羅と結んだ唐は660年に高句麗と友好関係にある百濟を攻め滅ぼした。百濟の復興をめざす高麗僧侶などの脱離をうけた倭国は、救援の兵を朝鮮に送ったが、663年、倭・百濟連合軍は唐・新羅連合軍と百濟内海で戦戦をおこない、大敗した(白

村江の戦い。政北をきっかけに中央集権的な国家の機構と官制をつくらねた。また唐・新羅の侵襲に備えて、大宰府の西方に水城を、西日本各地に朝鮮式山城をつくり、667年、近江の天智宮に遷都した。翌年、中大兄皇子は大津宮で即位して(天智天皇)、内政の改革をさらに進め、670年には最初の戸籍(庚午年籍)をつくり、律令の制定をめざした。

天智の政変と天智朝の成立

天智は子の中大兄皇子を中心とする有力中央氏族の登用によって強力な政治体制をつくらうとしたが、天智が亡くなると、672年、天智の弟大友皇子と中大兄皇子の間で古代史上最大の内乱、壬申の乱がおこった。1か月余の戦いに勝利をおさめた大友皇子は、飛鳥浄御原宮で即位した(天武天皇)。天武は、隋唐帝制をモデルに、天皇を中心とした中央集権的な律令国家の建設をめざした。中央官制を整備し、律令・歴史書の編纂に着手し、684年には八色の姓を制定して貴族の身分の序列を再編した。本格的な都城建設も計画し、682年、「新城」への行幸を経て新都藤原宮の造営が開始され、683年には新羅(高本契)の使用がはじまった。

天武の死後、皇后が即位して持統天皇となり、689年、飛鳥浄御原宮を遷都した。翌年にはそれをもとめて、唐齊永徽を模倣し、戸籍制度が完成した。地方行政制度も、国一郡一縣制として整備が進み、694年には街道で蕃蕃自治に区画した集約制を備えた本格的な都城藤原宮への遷都が実現した。律令にもとづく新しい国家の体制が確立するなかで、「天皇」号や「日本」の国号も使われるようになった。

白鳳文化の形成

7世紀後半には、天武とよばれる貴族や新羅系人層によって、仏教に加えて、新しい国家建設の意欲を反映した力強く清新な文化が形成された。この時期の文化は白鳳文化とよばれる。大宮大寺・薬師寺(本薬師寺)などの大規模な官寺が政府の保護を得て建設され、中央・地方の豪族たちの氏寺も多数造営された。和歌や漢詩も盛んにつくられた。彫刻では興隆寺の仏頭、絵画では法隆寺金堂壁画(1949年焼失)、高松塚古墳壁画などが代表である。

▲ p.28 ~ 29

## ② 歴史から学び、社会を主体的に創造するための日本史

- ▶ 創造や自主・自立の精神を重んじ、それらを育むことができるよう、先人たちが政治・経済・文化活動や技術開発などあらゆる分野で不断の努力を重ね、よりよい社会・生活と豊かな人間性を追求してきたことを系統的に記述しました。(教育基本法第2号に対応)
- ▶ 近代以降の世界において、個人の価値が見出され尊重されるようになってきた歴史的経緯を記述することによって、その重要性を知り、自他の価値と能力を互いに認め合う姿勢を身に付けることをめざしました。(同第2号に対応)
- ▶ 民主主義や基本的人権、男女の平等などが先人の努力によって歴史的に獲得されたものであることを記述し、それらを発展させていくことの大切さを理解させるとともに、その実現のために主体的な取り組みや他者との協力を重視する態度を養うことをめざしました。(同第3号に対応)
- ▶ 社会の発展や公共の福祉に尽くしてきた先人の歩みを記述し、社会に主体的に参画することの必要性を理解できるよう配慮しました。(同第3号に対応)

## ③ 日本人・地球市民としての自覚を養う日本史

- ▶ 歴史の中では時に戦争や災害などによって多くの人命が危機にさらされたこと、また人々がそれらを克服してきたことをも記述し、生命の重大な価値に気付かせ、あらゆる生命を尊ぶ姿勢と心を培うことができるように配慮しました。(教育基本法第4号に対応)
- ▶ 歴史を通じて人々が自然を利用・開発しながら生活を営んできたことを記述し、これを通して自然との共生をはかる態度を育成することをめざしました。(同第4号に対応)
- ▶ 歴史上の人々が自己の郷土や国家の発展に尽力してきたことを記述し、自他の国や文化・宗教などを互いに尊重し国際理解・異文化理解に努める態度を養うとともに、国際社会の諸課題と恒久平和のために能動的に取り組む姿勢を培うことができるよう配慮しました。(同第5号に対応)
- ▶ 文化財や遺跡・歴史的建造物などの写真を豊富に掲載し、伝統・文化への関心をもたせるとともに、それらを生み出した人々や身近な地域への敬意や愛着をもつことができるよう配慮しました。(同第5号に対応)
- ▶ 世界、特に東アジア地域の歴史を広く視野に入れた記述をすることによって、日本が様々な国や地域とかかわりながら歴史を営んできたことを理解させるとともに、国際社会の一員としての日本人の役割について考察させることをめざしました。(同第5号に対応)

## 2 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第1編	原始・古代の日本史について、そこに現れた様々な社会的課題や成果を、東アジアの動向もふまえながら丁寧に記述・解説し、生徒のより深い理解と多角的な考察を促すことに意を用いました(第1号)。	第1編すべて

図書の 構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
	人々が自然環境にあわせて進化をとげ、道具の改良など様々な工夫によって、自然を利用しそれと共存しながら生活を営んできたことを記しました(第2号・第4号)。	12～17, 22 ページ
	今日につながっていく国家の仕組みを整え、公共の精神に基づいて社会の形成と発展に寄与した人々とその考え方・思想について記述しました(第3号)。	22, 24～25, 28～33, 36～40 ～41 ページ
	現在の国際社会の平和と発展について考察するための契機として、特に東アジアを中心とする国々との関係について丁寧に記述しました(第5号)。	18～21, 24～25, 28～29, 34～35, 39, 42, 44, 45 ページ
	原始・古代の人々が創造した宗教・もの・建造物などを図版・写真とともに取り上げ、伝統としてのそれらを敬愛する態度をもちうるよう配慮しました(第5号)。	15, 17, 22～23, 24～25, 26, 27, 29, 34～35, 38～39, 40, 44, 45 ページ
<b>第2編</b>	中世の日本史について、そこに現れた様々な社会的課題や成果を、東アジアの動向もふまえながら丁寧に記述・解説し、生徒のより深い理解と多角的な考察を促すことに意を用いました(第1号)。	第2編すべて
	先人がその土地の自然環境に応じた作物の栽培や農業技術の改良に努めながら生産力を高めてきたことや、手工業・商業を発展させてきた人々の様子を、絵画資料などを豊富に用いながら記しました(第2号・第4号)。	48, 78～81 ページ
	戦乱の中で、民衆が生活や共同体を守るために自ら団結し、自治的な社会を作り上げていったことや、女性も一族や社会を担う存在であったことを記述しました(第3号)。	82～85, 93 ページ
	中世において現代にまでつながる芸術や生活様式が形成されたことを記し、伝統文化への理解を深めるとともに、今日的生活文化の背景を捉えることができるよう配慮しました(第5号)。	74～75, 53, 58, 60～63, 74～75, 90～91 ページ
	東アジアに成立したおもな国々と日本との政治的・経済的関係を系統的に記述し、武力を用いた衝突がありながらも互いに関係を深め、東アジア全体で活発な交易が行われるようになったことに触れました(第5号)。	51, 54, 64～65, 72～73, 75, 76, 77, 89 ページ
<b>第3編</b>	近世の日本史について、そこに現れた様々な社会的課題や成果を、東アジアや世界の動向もふまえながら丁寧に記述・解説し、生徒のより深い理解と多角的な考察を促すことに意を用いました(第1号)。	第3編すべて
	身分制度が確立し、個人の価値や自由が制限される中でも、人々がそれぞれの職分を果たしながら生活を営み独自の文化を創造したことを記述しました(第2号)。	101, 104～105, 108～109, 120～123, 124, 125, 128～129, 136～139 ページ
	その時々政治家などが積極的に政治・社会制度の整備や改革に取り組み、社会の安定と発展に寄与したことについて、改革の前後の状況や影響、功罪まで含めて具体的に記述しました(第3号)。	98～101, 106～ 107, 110～111, 114～115, 126～ 127, 130～131, 134～135, 142 ページ

図書の 構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
	<p>農業や諸産業など自然の利活用が盛んになった様子や、自然災害によってしばしば社会の安定が脅かされた様子を記述し、自然とのかかわり方や環境保全について理解と考察を深められるよう留意しました（第4号）。</p>	116～117, 118～119, 130, 143 ページ
	<p>近世において、今日も親しまれている伝統文化・文物が、海外の影響を受けながら、あるいは独自の工夫によって生み出されたことや、身近な地域で育まれてきたことについて記述し、それらの探究を通して郷土への愛着を深められるよう配慮しました（第5号）。</p>	102, 104～105, 120, 122～123, 136～139 ページ
	<p>当時の日本を取り巻く世界史的状況を記述し、日本を含む国と地域が制約のある中でも関係を築き相互に影響を与え合ってきたことについて、生徒が国際社会の一員としての自覚と責任をもつ契機となるよう、意を用いて記述しました（第5号）。</p>	96～97, 102, 103, 110～113, 120, 132～133, 138～139, 144～145 ページ
<b>第4編</b>	<p>近代の日本史について、そこに現れた様々な社会的課題や成果を、世界の動向もふまえながら丁寧に記述・解説し、生徒のより深い理解と多角的な考察を促すことに意を用いました（第1号）。</p>	第4編すべて
	<p>官民を問わず様々な人が将来を見据えながら自主的・自律的に改革や運動、勉学や勤労に邁進して新時代を築いた様子を、具体的な人物や事例を多く挙げながら記述しました（第2号）。</p>	151～159, 164～173, 184～193 ページ
	<p>民主主義や基本的人権など自由と平等を尊重する動きが広まったことを記述し、政治・経済や教育・文化などあらゆる面において改革が行われた経緯と今日に至る近代社会の歴史的意義を捉え、公共の福祉と主体的な社会参画のあり方について考察することができるよう配慮しました（第3号）。</p>	166～171, 188 ページ
	<p>産業の発達にともない、自然の汚染や破壊が進む一方で、環境保全の意識が芽生えていったことを記述しました（第4号）。</p>	184～187 ページ
	<p>日本が列強の一員となって東アジアに進出し植民地を建設していく過程を記し、それが東アジアの人々にもたらした影響について考察させるとともに、平等かつ平和的な国際関係の構築と相互の価値観や伝統を尊重することの重要性に気付かせることに意を用いました（第5号）。</p>	160～161, 172～173, 176～183 ページ
<b>第5編</b>	<p>二つの大戦期の日本と世界の歴史について、そこに現れた様々な社会的課題や成果を丁寧に記述・解説し、生徒のより深い理解と多角的な考察を促すことに意を用いました（第1号）。</p>	第5編すべて
	<p>この時代に現代の私たちの生活様式の基礎が形成されたことや戦争がもたらす生活への影響を記述し、生徒が自らの生活のあり方や、それにかかわる現代的な社会問題を客観的に捉え直す契機となるよう配慮しました（第2号）。</p>	202～203, 208～209, 228～229, 233 ページ
	<p>民主主義や人々の権利・平等などが、戦争や差別によって著しく制限された様子を記すとともに、差別の解消や権利の獲得に積極的に取り組んだ人々やその運動について記述しました（第3号）。</p>	200～201, 206～ 207, 210, 213, 217, 220～223, 226～227, 228～231 ページ
	<p>戦争を通じて国の内外を問わず多大な人命が人為によって失われ、国土の荒廃や環境破壊にもつながる兵器が使用されたことなどを記述し、生命と自然を尊重する心を育成できるよう意を用いました（第4号）。</p>	198～199, 222～233 ページ

図書の 構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
	二つの大戦が起こった経緯を、当時の国際関係を含めて丁寧に記述し、対話の重要性に気付かせ、平和的な国際社会の構築と発展を希求し、それに寄与する姿勢を育むことができるよう配慮しました（第5号）。	198～201, 212～227ページ
第6編	戦後から現在に至る日本と世界の歴史について、そこに現れた様々な社会的課題や成果を丁寧に記述・解説し、生徒のより深い理解と多角的な考察を促すことに意を用いました（第1号）。	第6編すべて
	家族制度や教育の民主化が図られるとともに、高度経済成長などを通じて労働や生活状態に変化と向上が見られたこと、また新たな問題も生まれてきたことを記述しました（第2号）。	236～243, 255, 256～259ページ
	民主化や差別解消などの実現に向けて戦後様々な改革や運動が進められたことを記し、それらの維持とさらなる発展のために、他者と協力し工夫を重ねることの必要性に気付かせることができるよう配慮しました（第3号）。	236～240, 249, 252～253, 254ページ
	戦後には産業の発展や核開発、災害などにより自然環境や人々の健康・生活を脅かすできごとがあり、対策がとられ克服の試みがなされてきたこと、一方で未解決の問題があることも認識できるよう意を用いて記述しました（第4号）。	249, 258～259, 266ページ
	戦後の世界では様々な対立がありながらも国際協調の努力が続けられてきた一方で、なお紛争が起こっている現状について、世界平和のために何が必要かを生徒が考察するために資するものとなるよう記述しました（第5号）。	246～247, 250 ～251, 253, 254, 260, 262～263, 266ページ
歴史編	日本史を学ぶにあたって必要な知識や技能を習得し、それを活用しながら諸課題について多角的に探究し、論述する力を身に付けることができるよう配慮しました。（第1号）	6～9, 84～85, 144～145, 270～273ページ
	様々な歴史的資料を取り上げ、それらに基づいて主体的に考察することにより、文化財としての資料の価値に気付かせるとともに、合理的に思考・判断する力を身に付け、社会の発展に寄与するための態度と能力の育成をめざしました。（第1号・第3号・第5号）	6～9, 84～85, 144～145, 270～273ページ

### 3 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

- ▶各編の冒頭には、これから学ぶ時代を概観する序文と年表を提示し、展望や振り返りの学習を行いやすくするよう工夫しました。
- ▶活字としてユニバーサルデザイン・フォントを使用したほか、色覚特性に配慮した色遣いをするなど、誰にとっても読み取りやすい教科書をめざしました。

# 編 修 趣 意 書

(学習指導要領との対照表, 配当授業時数表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
28-17	高等学校	地理歴史科	日本史B	
※発行者の 番号・略号	※教科書の 記号・番号	※教科書名		
35 清水	日 B 313	高等学校 日本史B 新訂版		

## 1 編修上特に意を用いた点や特色

### ① 詳しく具体的な記述と豊富な視覚資料

- ▶ 中学校で学んだ歴史的理解をさらに深め、日本の歴史と文化について思索を重ねられるよう、丁寧かつ具体的に記述しました。
- ▶ 細かな事項の習得・暗記にとどまることのないよう、それぞれの事象の因果関係や歴史上における意義などを丁寧に解説し、理解を有機的に深めることができるよう留意しました。
- ▶ 本文は105のテーマでまとめ、1テーマを1授業時間とし、授業進度の目安としました。また、各テーマを明確にするため、タイトルを具体的な疑問文で提示し、生徒が興味をもって主体的に日本史を考察することができるよう工夫しました。

**57 江戸幕府はなぜ滅亡したのか**

長州戦争 そののうしろい 尊王攘夷運動が高まると、それに敵対的な勢力も結集することとなった。薩摩藩や会津藩は、

▲ p.152

▼ p.49

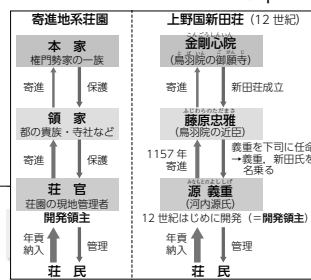
▼ p.135

- ▶ 視覚による理解と史料に基づく歴史学習を重んじ、写真や地図・文字史料・系図・概念図・統計など、多種多様な資料を豊富に掲載しました。

13 条約改正交渉 条約改正交渉で列強（左から英・仏・露・独）を日本ペースに追いこもうとする図。英が倒れかけていて陥落寸前と推測している。〔『国図珍覧』1893年10月21日号〕



p.174 ▶



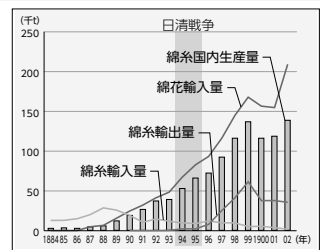
宛の側では、自由

**史料 株仲間解散令**

菱垣廻船問屋共より是迄年々金匁万石百両宛更加上納致来候処、問屋共不正之趣も相聞候に付、以来上納に不及候、尤向後右仲間株札者勿論、此外共都而問屋仲間并組合株と唱候儀者不相成候十二月

〔譯訳〕 菱垣廻船問屋からこれまで年に金一万二百両の買加金が上納されていたが、問屋に不正があったと聞いたので、以後上納をやめさせた。今後は右の株仲間であることを証明する札はもちろん、その他すべて問屋仲間と組合など称してはならない。

〔天保十二年十二月〕



12 綿糸紡業の発展 (『近代日本経済史要覧』) 1894年に綿糸輸出税が廃止され、1896年には棉花輸入税が廃止された。

p.184 ▶

## ② 32のコラムによる多角的な日本史

▶ 「もっと知りたい日本史」, 「地域の歴史」, 「女性の歴史」の3種類のコラムを用意し, 多角的な歴史像の構築に役立つようにしました。

▶ 「もっと知りたい日本史」(全17テーマ) …本文テーマを補足するとともに, 日本史をより深めることができます。

**もっと知りたい日本史 3 院政期の文化**

▶ **新興勢力と仏教の地方への広まり**

院政期の文化の特徴として, 新興勢力の武士や庶民の生活に対して関心が生まれたことや, 中央の文化が広く地方へ伝わったことがあげられる。前者については, 平将門の乱を描いた『将門記』, 前九年合戦を描いた『陸奥話記』などの軍記物が書かれ, 後白河上皇は民間の流行歌謡である今様や権馬衆を集成・分類して『梁塵秘抄』を編纂した。後者については, 陸奥の中尊寺金色堂と白水阿弥陀堂, 伯耆(鳥取県)の三弘寺投入堂, 豊後の富貴寺阿弥陀堂などの寺院建築や平清盛ゆかりの安芸(広島県)の厳島神社が, 当時の地方の文化水準を示している。

▶ **絵巻物・装飾経・仏教説話**

大和絵の手法を生かした絵巻と, 絵と詞書を交互に

▶ **扇面古写経** 経文とともに, 人々の生活のようすが色鮮やかに描かれている。(大阪市, 四天王寺蔵)

▶ **装飾経** 経文とともに, 各巻とも意匠をこらし, 金銀の金具で表紙を飾り, 美しい見返し絵をつけ, 水晶の軸に金銀の装飾金具や螺鈿細工をほどこすなど当時の工芸技法の粋をつくしている。平安時代に流行した装飾経の最高峰をなすものである。

また, インド・中国・日本の3国にわたる古今の仏教・世俗説話を収録した『今昔物語集』は, 装飾経とともに, 当時の仏教の影響力の強さを示す。

p.58 ▶

▶ 「地域の歴史」(全9テーマ) …北海道・沖縄の歴史を扱うほか, 東アジア地域を広く捉えるテーマも用意しました。

p.163 ▶

▼ p.102

**地域の歴史 3 東アジア海域世界**

近年の研究では, 小さな地域がより大きな地球規模の動きと深くつながっていたことが再評価されている。ここでは, こうした視点から日本列島の地域社会と14~16世紀のアジア海域世界とのつながりを再考してみよう。

▶ **東部ユーラシアの変容と東アジア海域世界**

14世紀後半, モンゴル帝国が崩壊すると, 東部ユーラシアでは明王朝が成立した。モンゴル帝国に服属していた高麗は内紛におちいり, 李成桂が高麗を倒して朝鮮王朝を立てた。一方, 日本列島では, 鎌倉幕府の倒壊以来, 中央権力が不安定な状態——南北朝内乱が続いた。このように, 従来の秩序が崩れると, 国家の統制からはずれた地域では, 民衆の自発的な交流の仕組みが成立する。それが, 東部ユーラシア・朝鮮半島・日本列島を

▶ **九州における「唐人」に関する地名**

明・清の通貨を銀主に変貌させ, 税制をもかえた。16世紀のポルトガル人旅行家ピント(1509?~1583)によると, 中国・寧波の近くにある双嶼には,

**地域の歴史 7 近代の琉球・沖縄**

▶ **もうひとつの「開国」**

薩摩藩と清の両属関係にあった琉球の近海にも, 19世紀になると欧米の船が頻繁にあらわれ, 船積に寄港する船もあった。1840年のアヘン戦争以後は, アジアの市場を求めるフランスやイギリスが琉球へも通商を求めてくるようになった。また, 1853(嘉永6)年にはアメリカの黒船が浦賀に上陸し, 幕府との交渉の前に通商を求めた。両属の関係が崩れる消極的な態度をみせるとの貿易をねらう薩摩藩とした強硬姿勢。日米和親条約を結んだのをはじめに, 日清戦争を結んだ。清

▶ **琉球処分後の沖縄**

うけるなかで, 琉球を再興するべく, 税制・地方制度などの結果, 集落単位の本島の税制上の背景とした強硬姿勢。日米和親条約を結んだのをはじめに, 日清戦争を結んだ。清

▶ **琉米修好条約**

条約が結ばれたことは, 西洋列強が琉球王國を国際的に独立国とみなしていたことを示しているといえる。(外務省外交史料館蔵)

▶ 「女性の歴史」(全6テーマ) …各編に1テーマずつ設け, 各時代における女性像や女性が果たした役割を丁寧に掘り下げました。

p.210 ▶

**女性の歴史 5 新しい女**

▶ **職業婦人の増加**

大正時代には, 女性たちの社会進出が進み, 一定の雇用関係のもとに労務を提供して報酬を得る職業婦人が増加した。職業婦人が増加したことは, 女性の生活にとっては産業革命に匹敵するほどの大きな変化であり, 家制度の束縛から解放されるという意味もあった。しかし, その裏には, 女性の低賃金という問題が隠されていた。男性教員二人分の賃金で女性教員3~4人を雇うことができるという低賃金の魅力が, 職業婦人が増加する最大の要因であった。

下の絵は, 「女給取りのいろいろ」と題された大正時代はじめの女性労働者の給料を示したものである。当時の初任給は, 小学校の男性教員が12~20円, 巡査15円, 大学卒の銀行員40円, 高等文官試験合格の公務員70円, 国会議員の月俸は250円, 総

▶ **新しい女**

職業婦人の増加や雑誌『婦人公論』, 『主婦の友』など女性向け出版文化の展開により, 女性の社会進出や家族・夫婦についての議論がもりあがりみせた。

▶ **再婚社のメンバー** 左から3人が平塚らいてう(当時25歳)。

米が1kg 9錢, 卵1個1厘8毫, はがき1枚1錢5厘, ビール1本22錢という物価を考慮しても, 男性のほうが高給であったことがわかる。

### ③ 東アジア・世界の歴史との関連を重視

▶日本の歴史を中心にしながら、その背景としての世界の歴史、特に東アジア諸国との歴史的環境や国際的な歴史についても系統的に記述しました。

#### 15 撰閲時代の文化の特色は何か

##### 東アジアの動乱と民族文化の勃興

10世紀、東アジアの政治地図は大きくぬりかわった。かつて日本と国交のあった唐(907年)・渤海(926年)・新羅(935年)があいついで滅び、それに代わって、中国大陸の北部では契丹(遼)が、南部では宋が、朝鮮半島では高麗が登場した。

唐の衰えを伝え聞いた日本の朝廷は、遣唐大使に予定された菅原道真の建議により、とりあえず894年の遣唐使派遣を中止した。貴族たちの欲する唐物は来航する中国商人から入手できたこともあって、その後、遣唐使の派遣は計画されなかった。

10世紀以降の東アジアでは、それまでの中国文化の模倣から脱して、各民族の個性にあった文化へとつくりかえていこうとするうごきが生まれた。文字文化の面でそれは著しく、契丹、西夏(タングート)、女真などで、漢字をもとに独自の文字が考案された。日本でも、9世紀に表音文字として、漢字の草書体をもとにした平仮名、漢字の一部をとった片仮名が生まれ、10世紀にその使用が定着した。

▲ p.42

#### 23 モンゴル(元)はなぜ日本を攻め取れなかったのか

##### ユーラシアの嵐

13世紀のはじめ、モンゴル高原にチンギス=ハンが出て、遊牧を生業とするモンゴル諸部族を統一すると、彼の孫の世代までに、モンゴルは西域の西夏、華北の金、西アジアのアッパース朝などを滅ぼし、一時は東ヨーロッパまでおびやかした。この大帝國を構成する国家群は、土地よりは人間中心の、機動性に富む軍事権力であった。チンギスの孫フビライは、帝国の東部を領有して中国王朝の性格を強め、1271年には国号を元に改めた。

モンゴル軍は1231年から朝鮮半島の高麗に侵略を開始した。当時高麗で実権をにぎっていた武人政権は、翌年都を開京から江華島に移して抵抗を続けたが、1260年にいたって従属的な講和を強いられた。1270年、三別抄という武人政権の軍隊が反乱をおこし、海上を南へ移動しながら抗戦を続けたが、3年後に済州島で元・高麗連合軍に壊滅させられた。

1261年、フビライは南宋と戦端を開き、1276年に首都臨安(杭州)を陥落させた。元軍は東南アジアにも侵攻し、1287年にミャンマーのパガン朝を服属させたものの、翌年ヴェトナムで大敗を喫した。また1292年のジャワ征討も失敗に終わった。

p.64 ▶

▶編纂では、各編で扱う時代の日本や世界の歴史を文章と年表でまとめ、時代と地域を広く捉える視点を養うことができるよう工夫しました。

## 第4編 近代1 明治期

### 明治期の日本と世界

- 欧米諸国における国民国家の形成と世界進出
 

イギリスやフランスをはじめとするヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国は、革命や内戦・独立戦争を通じて、19世紀末には国民国家へと転換していった。国民国家とは、明確な国境をもち、言語や歴史を共有する国民によって構成される国家のことである。

さらに、イギリスが18世紀に産業革命を実現し、19世紀になるとアメリカ・フランス・ドイツで産業革命が進行して、資本主義社会が形成された。各国では商品や余剰資本を輸出するため、海外市場を求めて世界へ進出した。その結果、19世紀後半から第一次世界大戦の時期にかけて、イギリス・フランス・ドイツなどのヨーロッパ列強やアメリカ、日本が植民地や勢力圏の獲得競争をおこない、世界を分割していった(帝国主義)。
- アジア諸地域と近代化の模索
 

ヨーロッパの列強はアフリカ・アジアの諸地域を「無主の地」(ほかのどこかの国にも属していない土地)として植民地にしていった。しかし、東アジアにおける中国・朝鮮・日本の3国とは、不平等ながらも条約を結んだように、「国家」として認められたため、3国は欧米の植民地となることを免れた。

東アジアなどの非ヨーロッパ地域では、独立を維持するために、西ヨーロッパの近代社会を象徴する制度や技術、さらにはその背後にある価値観を模範として採択しようとする動きがみられた。しかし、各地域の伝統的な価値観と衝突することになるため、反発や抵抗を生むことも多かった。
- 日本の近代化
 

ペリーの来航によって西欧国際社会に強制的に編入された幕末期の日本では、当初、「攘夷」が盛況をふるった。しかし、攘夷を主張して江戸幕府を倒した明治新政府は、政権をにぎるとすぐに「開明」を奉じたところから、転じて「文明開化」を進めていった。それは、政治や経済のみならず、文化や風俗にもおよび、徹底的なものであった。さらに、1880年代前半になると、条約改正を実現するため、積極な欧化政策が進められた。

その結果、日本も欧米にならって、憲法や議会政治をはじめ、さまざまな制度を導入し、国民国家の建設を進めた。また、対外的にも、19世紀末には日本も帝国主義の一員となった。

時代	西暦	日本	朝鮮半島	中国	欧米
江戸	1860	ペリー来航	日清和親条約	アロー戦争	アメリカ南北戦争
		開港 攘夷運動 幕府の権威低下 尊王攘夷運動 結核連合村藩運動	日米修好通商条約		
明治	1870	江戸幕府滅亡	明治維新	欧米文化・憲法の導入	
		立憲体制の確立 内閣制度	憲法改正 自由民権運動 西南戦争	日清修好条約 日朝修好条約 琉球処分	ドイツ帝国成立
明治	1890	立憲体制の確立 内閣制度	立憲体制の確立 内閣制度	日清戦争	シベリア鉄道竣工
		初期国会 藩閥政治と民権の対立	立憲体制の確立 内閣制度	日清戦争	
明治	1900	立憲体制の確立 内閣制度	立憲体制の確立 内閣制度	日清戦争	日露戦争
		立憲体制の確立 内閣制度	立憲体制の確立 内閣制度	日清戦争	日露戦争
明治	1910	立憲体制の確立 内閣制度	立憲体制の確立 内閣制度	日清戦争	日露戦争
		立憲体制の確立 内閣制度	立憲体制の確立 内閣制度	日清戦争	日露戦争

▲ p.146 ~ 147





## 2 対照表

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
歴史編1【歴史と資料】奥州平泉「仏国土」の世界	(1) 原始・古代の日本と東アジア ア	6～9ページ	5
<b>第1編 原始・古代</b>	<b>(1) 原始・古代の日本と東アジア</b>	<b>10～45ページ</b>	<b>17</b>
第1章 日本文化のあけぼの	(1) 原始・古代の日本と東アジア イ	12～19ページ	4
第2章 古代国家の形成と東アジア	(1) 原始・古代の日本と東アジア イ	20～27ページ	4
第3章 律令国家の成立と都城	(1) 原始・古代の日本と東アジア イ	28～35ページ	4
第4章 古代国家の推移と社会の変化	(1) 原始・古代の日本と東アジア ウ	36～45ページ	5
<b>第2編 中世</b>	<b>(2) 中世の日本と東アジア</b>	<b>46～93ページ</b>	<b>26</b>
第1章 古代から中世社会へ	(2) 中世の日本と東アジア イ	48～53ページ	3
第2章 武家政権の成立と鎌倉文化	(2) 中世の日本と東アジア イ	54～67ページ	7
第3章 室町幕府と北山文化	(2) 中世の日本と東アジア ウ	68～81ページ	7
第4章 下剋上の社会と庶民の台頭	(2) 中世の日本と東アジア ウ	82～83, 85～93ページ	5
歴史編2【歴史の解釈】中世の村落生活を復元する	(2) 中世の日本と東アジア ア	84～85ページ	4
<b>第3編 近世</b>	<b>(3) 近世の日本と世界</b>	<b>94～145ページ</b>	<b>28</b>
第1章 中世から近世社会へ	(3) 近世の日本と世界 イ	96～105ページ	5
第2章 幕藩体制の成立と国際関係	(3) 近世の日本と世界 イ	106～113ページ	4
第3章 幕藩体制の展開と元禄文化	(3) 近世の日本と世界 ウ	114～125ページ	6
第4章 幕藩体制の動揺と化政文化	(3) 近世の日本と世界 ウ	126～143ページ	9
歴史編3【歴史の説明】「鎖国」という言葉の歴史	(3) 近世の日本と世界 ア	144～145ページ	4
<b>第4編 近代1 明治期</b>	<b>(4) 近代日本の形成と世界</b>	<b>146～193ページ</b>	<b>23</b>
第1章 近世から近代社会へ	(4) 近代日本の形成と世界 ア	148～153ページ	4
第2章 明治維新と立憲国家の成立	(4) 近代日本の形成と世界 ア・イ	154～173ページ	9
第3章 日清・日露戦争と東アジア	(4) 近代日本の形成と世界 イ	174～183ページ	5
第4章 近代産業の発展と国民生活	(4) 近代日本の形成と世界 ウ	184～193ページ	5
<b>第5編 近代2 大戦期</b>	<b>(5) 両世界大戦期の日本と世界</b>	<b>194～233ページ</b>	<b>19</b>
第1章 第一次世界大戦と日本の社会	(5) 両世界大戦期の日本と世界 イ	196～201ページ	3
第2章 政党政治の発展と大衆社会	(5) 両世界大戦期の日本と世界 ア	202～211ページ	5
第3章 第二次世界大戦への道	(5) 両世界大戦期の日本と世界 ウ	212～219ページ	4
第4章 第二次世界大戦と日本の社会	(5) 両世界大戦期の日本と世界 ウ	220～233ページ	7
<b>第6編 現代</b>	<b>(6) 現代の日本と世界</b>	<b>234～269ページ</b>	<b>17</b>
第1章 占領下の日本	(6) 現代の日本と世界 ア・イ	236～245ページ	5
第2章 日本の独立回復と戦後政治	(6) 現代の日本と世界 ア・イ	246～255ページ	5
第3章 経済大国日本への道	(6) 現代の日本と世界 ア・イ	256～261ページ	3
第4章 現代の世界と日本	(6) 現代の日本と世界 ア・イ	262～269ページ	4
歴史編4【歴史の論述】 地域からみた戦争・占領・平和一光が丘の現代史	(6) 現代の日本と世界 ウ	270～273ページ	5
		計	140